「再構成」と「モチーフづくり」をキーワードとした創作指導のあり方（1）
～曲想を生かした音楽づくり～

江田　司

音楽づくりはゼロから出発して形あるもの「音楽」をつくり出す。一方，演奏や鑑賞の場合，音楽は完成されたものとして我々の前にある。「音楽」を真ん中におくとすれば，まったく逆の方向から迫っていることになる。そこで，「再構成」という発想をもって，様々な旋律やリズム，伴奏パートで出来上がっている合奏曲『ラバースコンチェルト』（１番のみ）を，４回繰り返される合奏曲に組み立て直すところから，音楽の構造を感じ取って聴いたり，表現する際の工夫の拠り所を子どもたちの身に付けさせようと考えたのである。本実践では，「再構成」において一定の成果を得た。しかしながら，キーワード「モチーフづくり」では記譜そのものの技能面で課題が残った。

キーワード：再構成，モチーフづくり・音楽づくり，器楽との関連，協同的な学習

１．研究の目的

音楽科において「子どもの学びの質の高まり」を求めるには，教科提案「楽しく学ぶ基礎・基本」で述べたように，音楽的な関心と意欲・態度に支えられた「知識・技能・能力」が不可欠である。基礎・基本を育てる窓口を音楽づくり（創作）指導に求め，本研究では次の２点を明らかにしたい。

① 完成された楽曲をいったんバラバラにして「再構成」する活動（remix）を通して，子どもたちに音楽が構成される要素や仕組みを理解させることは有効なのか。

② 作曲上の一般的な考え（作品の完成という目標）を敢えて持たず，ごく小さな旋律やリズムの（モチーフ的な）作曲活動を構成することで，子どもたちの読譜や記譜の力が高まるとともに，歌唱や器楽表現において旋律の細やかな音の動きを捉えようとする表現力が育つのではないか。

以上は，小・中学校を連続する子どもたちの学びを考えるとき，中学校の「創作」授業に向かうために欠かせない基礎的・基本的な「知識・技能・能力」である。また，これらを通してすべての子どもたちに，音楽のよさや面白さ，美しさを感じ取らせるとともに，曲想表現の力，視奏力を付けようとするものである。

本実践は，「小学校学習指導要領」（音楽）第５学年及び第６学年の以下の項目に対応する。

Ａ表現(2)器楽ア～エ，(3)音楽づくりアとイ

同時に，新しく示された表現と鑑賞の２つの領域を支える〔共通事項〕の指導事項アとイにも直接かかわる内容となる。

２．研究の方法

実践の具体的な方法は次の２つである。

① 協同的な学びを組織する。

② 「再構成」「モチーフづくり」を具体的には「楽曲をアレンジする活動」と位置づける。

2.1. 扱う教材（楽曲）

『ラバース コンチェルト』

（デニー ランデル・サンデー リンザー 作曲／石桁冬樹 編曲）

原曲クリスティアン ペツォルト 1677~1733

教科書「小学生の音楽６」（教育芸術社）所収。歌唱やアルトリコーダーで中学校でもよく取り上げられる楽曲である。小・中学校で連続した経験への期待が持てる。教科書の編曲では，「主旋律」，「副次的な旋律」，「和音を支える旋律」と「低音」による伴奏部の各パートに楽器の指定がない。さらに「３種類のリズム・パターン（８ビート）」が欄外に書かれていて，７つの素材*に分けることができるなどの特徴を有する。

2.2. 教材の扱いと学習のスタイル

（◎）＞楽曲をアレンジする活動

（☆）＞協同的な学びの関わり

◎教科書にある『ラバースコンチェルト』の合奏楽譜を７つの素材（*上述）に分解する。

◎課題「この楽曲を４回繰り返して演奏するとしたら，この７つの素材をどう組み合わせて　変化を付けるか」を〔４人〕グループに与える。

☆本課題は，すべての子どもにとって個人では解決し難いと考えられる。ここに協同的な学びの必然性が生まれる。

◎７つの素材をさまざまに選んで組み合わせて構成を工夫する。〔remix：再構成〕

◎簡単なリズムを作って和音をもとに新しい旋律素材〔モチーフ〕を作り加える。

◎新しい〔モチーフ〕には，例えば「やさしい」「楽しい」「新しい」など曲想的なイメージが描けるようにする。

◎教科書にはないピアノ伴奏パートも８番目の素材とする。１つの素材を分割したりする展開も可

能である。
☆グループで考案したアレンジを，グループ以外の全員に演奏してもらい，はたして思い描いた曲想通りのアレンジとなっているか，考案グループで自己評価していく。

2.3. 題材の指導計画

題材全体の計画は10時間を予定した。

第１次　楽曲の「構成」を工夫しよう。（４時間）
・４人グループに分かれる。
・「『ラバースコンチェルト』を４回繰り返して演奏するとしたら，４つの素材をどう組み合わせて変化を付けるか」を考える。（課題プリント：グループでの活動）
・結果を発表して実際に演奏して聴き合う。
・打楽器の３素材とピアノ伴奏を加え，計８つの素材で構成を工夫する。（課題はグループでの活動）

＊参考鑑賞教材：The Beatles ／ 1967-1970 から「Let it be !」（CD 番号：TOCP-51129-30）

主旋律①に替わる「新しい旋律」を和音から「リレー作曲」する。課題そのものが大きいので一斉学習で行った。

「リレー作曲」の方法／指導書の簡易伴奏譜をもとに，リコーダーの音域を考えコードネームからあらかじめ和音を設定する。次に主旋律と重ならないように教師が設定したリズムに沿って，１人１音ずつ順に決めて旋律を作る。できた旋律そのものは和音内の音で構成されているので，対位的であることは望めないまでも，他の旋律と響き合う。途中音を出して吟味しながら作ることもできる。また，よりなめらかな旋律創作へと向かえる利点がある。

第２次　曲想にあった「飾りのふし」を作ろう。（４時間）
・『○○○○のラバースコンチェルト』を作る。「○○○○」には，「やさしさ・かなしみ・よろこび」等々，気持ちを表す言葉を入れてアレンジへのイメージを持つようにする。
・（各16小節の）どの部分に，どんなリズムのどんな旋律〔モチーフ〕を入れるのか考えてグループで作る。

第３次　工夫して演奏しよう。（２時間）
・各グループが作ったアレンジをもとに演奏して聴き合う。

３．授業の実際～題材「曲想を生かして」

3.1. 授業学級（６年生）の子どもたち

変声期を迎えている男子も多いが積極的でよく声が出る。授業態度もしっかりしていて集中力が高い。授業が月曜６限・隔週火曜日２限と週前半に集中していて行事祝日の関係で抜けることも多いのだが，ペースは崩れない。担任が毎朝歌わせてくれていることもありがたい。第１学期，『ラバースコンチェルト』はソプラノ・リコーダーで主旋律を吹いた。また副次的な旋律や和音伴奏，バスなどにキーボードを入れて打楽器，ピアノ伴奏も加え合奏を行った。この曲をソプラノ・リコーダーで吹くことについて，11月段階で37名中２名が「努力を要する」と感じている。（「とても満足」23名／「おおむね満足」12名）

２学期に入って45日間で５回の授業しか行えていないが，実習生の指導もあって副次的な旋律をアルト・リコーダーで挑戦している。運指の切り替えがかなり難しく，まだ約４割（15人）の子どもたちが「努力を要する」と感じている。

一方，読譜に関しては約２割（８人），楽譜を書くことに関しては約３割５分（13人）の子どもたちが「努力を要する」と感じている。

上述４項目のうち３項目以上に「努力を要する」と感じている子どもは６人である（うち１人は４項目すべてにわたる）。また３項目以上「とても満足できる」状態としている子どもは５名である（うち１名は４項目すべて）。したがって，本題材ではソプラノ・リコーダーを中心に用い，適宜，実態に応じてアルト・リコーダーを加えることにする。

3.2. 協同的な学習を組織する

①４人でするべき作業内容（目標）を明確にする。

→「リレー作曲」「楽譜化」「分担して演奏」「１人で解くには難しい課題を与える」

→「話し合いの経過を文章で残す」「全員で課題プリントを書く」

②苦手な子どもに対して助けることのできる子どもがグループの中にいる。

→最初，グループ分け・席順は教師が決める。

→男女ペア×２＝４人が基本。４人以上になると何もしない子どもの出現率が高くなる。

→苦手な子ども同士をペアにしない。静かに効果的に学習を進めるには男女ペアが望ましい。

→座席は，楽譜化が苦手な子どもが〔右利き〕の場合，左側に助ける子どもを配置するとよい。

→支援を必要とする子どもには，落ち着いた（クールダウンできる）子どもたちを配置する。

→「V字型４人座席配置」を使うと，一斉学習とグループ学習の切り替えがスムーズにいく。

③１人１人が動かないと先に進めない課題にする。

→「リレー作曲」であるから，音を決めていく

役割が１人１人にある。

→「(音を・順番を・楽器を) 決めていくこと」を「キーポイント」にしている。

④１人が音を決めていくごとに話し合いがもてる「リレー作曲」～音を吟味する習慣を付ける。

→リコーダーなどの楽器で音を出しながら進める方法もあるが，一切音を使わないで，いったんすべての音を決めてしまう方法もある。楽器を使わないことで音の動きに偶然性が発揮されておもしろい旋律が作れたり，かえって音を出したとき吟味し修正に寛容な態度となれる。

⑤音が出来上がっていくことで達成感がもてるようにする。

→考えたことを音にして合奏するまでの「一貫した活動」が望ましいが，４人グループという技能面でのハンデを考えると，演奏は「作った人たち」以外のグループに委ねる方が，より客観的に自己評価できるのではないかと考える。修正は随時行うことにして思考の足どりを追えるようにする。

→子どもたちの意見を聴きながら１つの編曲としてまとめて，最終的には「市音楽会」での発表曲とする。

《「ラバースコンチェルト」×４回繰り返す》(６年C組)

班No. ◆アンダーライン班は実音聴取済	◆太字（⑤）は，前の時間に修正が加えられたところ。 ◆（☆）印がある班は，楽曲の途中に楽器の入れ替わりがある。	５班 １５・１７ ２３・２４	（１）①②　／　⑦ （２）①　④／⑤　⑧ （３）②③　／⑤⑥　⑧ （４）①②③④／　⑧
１班 １・２ ３・５	（１）①　④／　⑥　⑧(⑤×) （２）①②③　／⑤⑥ （３）①②　／⑤　⑦⑧(④×) （４）①②③④／⑤⑥　⑧	６班 １８・１９ ２５・２８	（１）①　③　／　⑦⑧　☆ （２）①②　／⑤　⑦⑧　☆ （３）①②　④／　⑥⑦⑧　☆ （４）①②③④／⑤⑥⑦⑧　☆
２班 ４・６ ７・８	（１）①②　／⑤⑥⑦⑧　☆ （２）①　④／⑤⑥⑦⑧　☆ （３）②③　／　⑧ （４）①②③④／⑤⑥⑦⑧	７班 ２０・２１ ２９・３０	（１）①②　／ （２）①②③　／ （３）①②③　／⑤　⑧ （４）①②③④／⑤⑥⑦⑧
３班 ９・１０ １１・１４	（１）①②　／　⑥　⑧ （２）①　③　／⑤　⑦ （３）②③④／　⑥　⑧ （４）①②③④／⑤　⑦⑧	８班 ２６・２７ ３２・３３	（１）①　④／⑤　⑦　☆ （２）①②　／　⑥　⑧　☆ （３）②③④／⑤⑥　⑧　☆ （４）①②③④／⑤⑥⑦⑧　☆
４班 １２・１３ １６・２２	（１）①②③　／⑤ （２）②③④／　⑧(①×) （３）①　④／　⑥　(②×) （４）①②③④／⑤⑥⑦⑧	９班 ３１・３４ ３５・３６ ３７	（１）①　③　／　⑥　⑧ （２）①②　④／　⑥⑦ （３）②③　／⑤⑥　⑧(①⑦×) （４）①②③④／⑤⑥⑦⑧

◇３回の授業での変化を比較する。〔例／１班〕

⇒	１０／２３	１１／５	１１／８
テーマ	４回繰り返すとしたら	人に分かるように細かく考える	音を出して考えをまとめてみよう
授業毎パート選択の変化	（１）①　④／ （２）②③　／ （３）①②　④／ （４）①②③④／	（１）①　④／⑤　⑧ （２）②③　／⑤⑥ （３）①②　④　／　⑦ （４）①②③④／⑤⑥　⑧	（１）①　④／　⑥　⑧(⑤×) （２）①②③　／⑤⑥ （３）①②　／⑤　⑦⑧(④×) （４）①②③④／⑤⑥　⑧

3.3.「かざりの旋律」をつくる」

『ラバースコンチェルト』に自分たちのグループで決めたイメージに沿って，「かざりの旋律」を考えた。「かざりの旋律」は合いの手的なものである。(「モチーフづくり」)

○異なる能力を持つ男女４人のグループ(９つの班) を組ませ，各班がほぼ能力的に均等になるよう組合せを心がけた。その結果，本時の課題「班で協力して和音から指定されたリズムに「かざりのふし」(４小節フレーズ) を作ること。書くこと」については，すべての班で時間内に終えることができた。

○　題材全体を通して，分担して楽器を使いながら音で確かめる活動をしていたので，本時でも各班で作った旋律線を自然に音で確かめようとする姿が見られた。利用していた楽器は主に鍵盤楽器（ピアノ，ハーモニーキーボード，電子オルガン，シンセサイザーなど）であった。

同じリズムの繰り返しを基本に，フレーズの途中や終わりなどに挿入する。その小節の和音の音を使い，リズム型や音程の上行・下行を工夫する

ことで「やさしさ・かなしみ・よろこび」等々，気持ちを表す音型作りにチャレンジした。４人グループだからこそできた学習ではないかと考える。楽器はリコーダーを予定しているが，状況によっては鉄琴や木琴その他の楽器に広げてもよい。

本時を進めるキーワードは，「どの部分に」「どんなリズムの」「どんなメロディを入れるのか」とする。１つ１つグループで話し合って決めていくが，困っているグループが抱える課題については，必要に応じて全員に意見を求めるような場を用意したい。また，実際に音を出してイメージ通りのアレンジになっているかどうかを確かめさせてみることも考えている。これらの活動を通して，音楽の構成に関心をもち，曲想や音楽を特徴付けている要素を感じ取って表現を工夫する態度を育てたい。

４．授業の考察

○作り始めの段階で，各小節の和音間にラインを引きながら話し合われる姿が見られた。この方法は，子どもたちが見つけ出したもので視覚的にも分かりやすいよいアイディアである。また，音を選ぶ基準として，主旋律や副次的な旋律で使われていない音を選ぶ姿も見られた。これは非常に高次な内容である。協同的な学習の成果として，いわゆる，学習の仕方が分かること以上に，少人数の中で「新しい考え方が出され，試され，吟味される」授業となったのではないか。

○本時授業での「学びの質の高まり」は，題材の目標に即した実証的な側面から考察すべきであろう。本時の約１ヶ月後，子どもたちが身に付けた成果を知るために，次の《旋律創作テスト》を行った。内容は本時の課題内容「班で協力して和音から指定されたリズムに４小節フレーズを作る」を簡略化し班単位ではなく班を構成している個人を対象にしたものである。概要を述べる。

『ラバースコンチェルト』１６小節・２８の和音からの旋律創作》

問題は，主旋律・副次的な旋律等とともに各小節に「構成和音」を提示してある。この「構成和音」から１つだけ音を選び和声的な旋律を作る。
〔２題／３２小節。時間：１５分間。〕
５段階で評価／５段階評価の観点：５＞１６小節以上できている。４＞５～１５小節（２フレーズ以上）できている。３＞４小節（１フレーズ）できている＝本時のグループでの課題程度。２＞少し手を付けている（１～３小節）。１＞まったくできていない。
★和音から旋律の音を選ぶことが理解できていることから，おおむね満足を「３」とする。

◆結果／クラス平均：４点。

得点分布：５点＞１２名。４点＞１１名。３点＞９名。２点＞１名，１点＞１名。
調査時の欠席３名。満点５点のうち３６小節を完全解答した者＞３名。以上の結果から，おおむね満足以上の者３２名。さらに支援を必要とする者２名となった。この２名については同じ班（２班）の構成メンバーである。

班別平均点：１班＞4.5点。２班＞2.5点。３班＞4.0点。４班＞4.8点。５班＞3.8点。６班＞4.3点。７班＞4.5点。８班＞3.8点。９班＞3.8点。

５．成果と課題

《分析》から成果と課題を明らかにしたい。

班別に見た最高平均得点は4.8点（第４班）。最低平均得点は2.5点（第２班）。他の班がほぼ平均得点の近似であることからすれば，この差は非常に大きい。また，第２班以外の８つの班については，事前の調査結果と比較して各班の構成メンバーそれぞれすべての読譜力・記譜力・処理能力ともに上昇しているのだ。これら８つの班では協同的な学習が効果を示したと見なすことができるだろう。（成果）

一方，第２班においても協同的な学習が効果を示さなかったわけではない。前時授業後，シンセサイザーSDX4000を前に，真剣に話し合いながら４回繰り返しの『ラバースコンチェルト』の「構成」を何度も何度も試す姿が見られたのである。なぜこの班に記譜・読譜・処理能力に成果が現れなかったのであろうか。この点を解明しておくことが，今後協同的な学習を立ち上げていくときに必要十分条件となるのではないか。（課題）

○導入で，９班の中で一番出遅れていた第２班が行った「構成の工夫」を，全員が参加しての合奏で確かめた。この活動は第２班を活性化すると同時に，これまで各班のみの活動で電子オルガンやシンセサイザー等で確かめていた音や音楽の重なり方が明確にとらえられるようになり，意欲化もはかられた。（成果）

○結果的に，３種類の学習プリントを用意した。本時では，自由創作よりも易しい「リズムを指定した課題」とした。協同して解決すべき課題を明確にしていることで，班の活動が活発に行われた。課題としてはややむずかしい「リズム構成」にもかかわらず「もどす」効果が見えた。課題としては，旋律線が明確な「副次的な旋律づくり」を目指す場合，前段階として「和声的な旋律による伴奏づくり」すなわち「１和音に対して１音を選ぶ活動」を十分に行う必要性を感じた。（課題）